

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

號二四三第。日一十月十輯編局報情

實實週報

救國救民



何井真知

億名大義に生く

大宮島とテニヤン島の戦闘経過

は七月二十一日早朝に開始された。敵は西北岸の明石洞沖に航空艇を多数降下して機銃六十隻以上、戦艦、巡洋艦、駆逐艦等約三十隻が侵入し、猛烈な砲撃の支援をうけて上陸を企図するに至つた。明石洞方面では、六時頃、水陸兩用戦車約五十輛及び上陸用舟艇約二百隻を以て一齊に接岸して来たが、我が守備隊、特に木田山附近より我が砲兵の猛烈により大損害を受け、理窟の線で敵時間釘付けされてゐたものの、正午頃、遂に上陸を強行し来た。また昭和洞方面では、八時頃、水陸兩用戦車五十輛及び上陸用舟艇二百隻以上によつて上陸を開始した。これを避けて我が部隊は、敵戦車五十輛のうち三十輛を撃沈させしめ舟艇の多くを撃沈したが、午後になり敵は海岸線から二キロ内外の線まで進出したのであるが、夕刻まで上陸した敵の兵力は、兩地を合すると二個師団以上と思はれる。我が部隊は兩地に對して果敢な夜襲を決行、特に見崎洞附近では海岸まで突進したが、猛烈な砲撃に妨げられ、遂に敵を撃退するに至らなかつた。

二十一日も敵は続いて上陸し、また敵機が絶えず五、六十機同島の上空にあり、空襲よりする敵の拡張はいよゝく熾烈となり、我が方の損害は次第に激増していつた。二十三日、二十四日にも、敵が上陸した地点の附近で激戦が繰返された。須磨附近を守備してゐた我が部隊は、二十四日、二回に亘り激戦に上陸しよつた敵に多大の損害を與へてその企圖を挫いた。第一回目は上陸用機銃二隻、水陸兩用戦車二十輛以上で突進して来たが敵の機銃二隻、戦車十一輛を撃沈し、第二回目は上陸用機銃二隻のうち一を撃沈させ、完全に撃退した。また夕刻には洞内に侵入してゐた一万トン級機銃艇に砲撃二十七發を命中させたため、同艇は白煙を吐き傾斜したまゝ蒼煙として運走した。

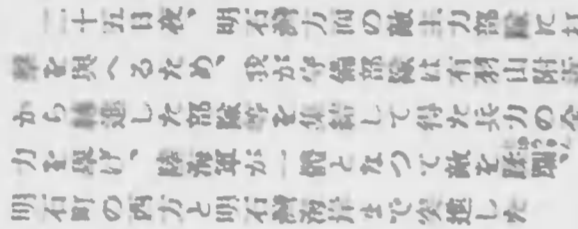
しかしながら二十四日の夕方まで昭和洞方面の敵は、次第に有羽山、天上山の線に進出して陣地を構築、また戦車は有羽山附近の我が陣地を突破して更に東方に進出するに至つた。須磨地域の守備隊は依然として表半島の機銃部で飛行場を確保してゐた。明石洞方面の敵は我が方の反撃のため大して進出できなかつたが、敵機は執拗に襲来し、六月十一日から二十四日までに来襲した敵機の機銃は七十機以上で、ために我が部隊の行動は頗る困難となつた。

二十五日夜、明石洞方面の敵主力部隊に打撃を與へるため、我が守備隊は有羽山附近から繰進した部隊等を連結して得た兵力の全力を現け、陸海軍が一體となつて敵を逐退、明石洞の西方と明石洞海岸まで突進した。有羽山附近から主力に合した我が部隊は、敵の監視網のため行動が極めて困難となり、太郎洞から木田山附近までの僅か十五キロを前進するのにも二昼夜を要した。敵の上陸以來、木田山北方高地を死守してゐた石井中隊は、この攻勢の樞軸となつて、敵約一千を殲して中隊長以下十數名となつたが、しかもよく任務を完了した。また表半島陣地の我が部隊はこの攻勢に呼應して、天上山附近から茶屋山附近の敵主力の位置に向つて敵中隊を突撃し、突進した。この攻勢で敵を全く撃退せしめたものの、我が方の戦力もまた非常に低下した。

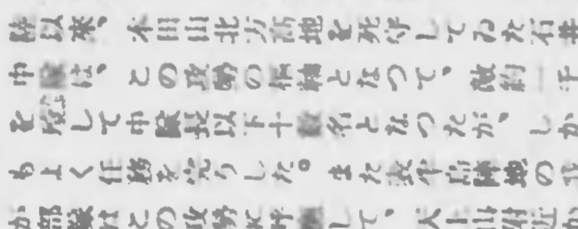
二十六日、我が兵力が甚少であることを知つた敵は、戦車を先頭に全機に亘つて襲撃し、オオヤカ、オオヤカ、オオヤカ、同じく南方高地に突入したほか、木田山高地にも次第に侵入して来た。二十八日には木田山南方高地にも敵戦車を発見し、正午以後は戦況が急に熾烈となり、我が部隊の大傷は僅か六門を算するのみとなつたので、我が部隊は島の北部にある森林地帯を利用して持久戦に出ることとし、二十九日の日夜後に轉進を開始して、三十一日の夕刻までには春山山南北の線に戦線を整理した。敵の上陸以來マングン山で勇戦敢闘、敵を断平阻止してゐた加藤兵部隊は、この轉進に際して最後まで要衝を確保し、部隊の行動を容易にさせて後、大砲と運命を共にした。八月三日、戦車三十輛内外を伴つて敵部隊が我が陣地前に近迫して来た。この頃には我が部隊の指揮連絡、補給はいよゝく困難となり、戦力は更に減殺され、我が部隊はイバオ以西に戦線を整理せねばならなくなつた。五日には、戦線が全く崩壊した。越えて七日、又木山の部隊司令部周辺に集結した將兵のうち、戦ひに堪へるものは陸海軍將兵合せて僅か三百名となり、一門の大砲もない状態であつた。この日の夜、軍艦のため立つ能ざるものは悉く自決した。翌八日夜半、最高指揮官が率先陣頭に立ち、又木山南方の三叉路附近の敵群中に、自刃を執つて最後の突撃を敢行した戦線で、その後、生存者は各局地で引續き遊撃戦を敢行してゐたが、九月二十七日頃までに全員壯烈な戦死を遂げたものと認められるのであるが、最高指揮官から報告された電報のうちから、その二三を守備隊將兵の隊としたい。



小島中隊指揮官



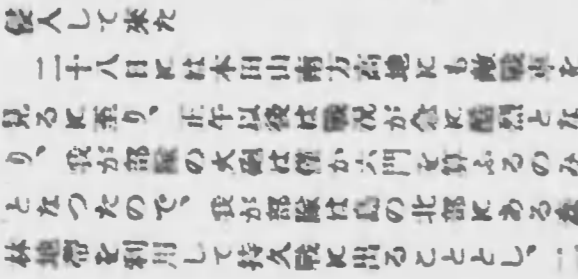
品高中隊指揮官



本郷大隊長



佐方大隊長



方藤大隊長

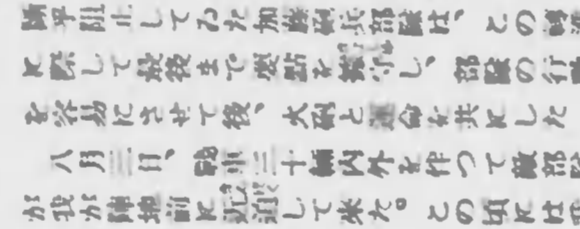
大本營發表(昭和十九年九月十日)
一、大宮島及びテニヤン島の我が部隊は其の後戦も一兵に至る迄、勇戦力闘したる結果に九月二十七日迄に全機壯烈なる戦死を遂げたものと認む。同方面の陸軍指揮官は陸軍中將小島英良、海軍部指揮官は陸軍中將高品盛、海軍部指揮官は海軍大佐杉本豊、テニヤン島の陸軍部指揮官は陸軍大佐新方敏夫、海軍部指揮官は海軍大佐大塚吉一なり。
二、兩島の在任同胞義勇隊の作戦に協力し全員我が將兵と運命を共にせるものを知し



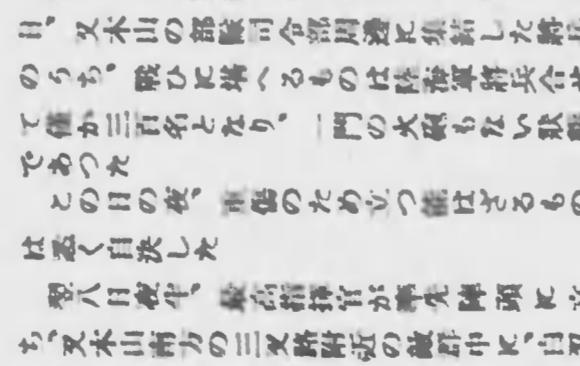
品高中隊指揮官



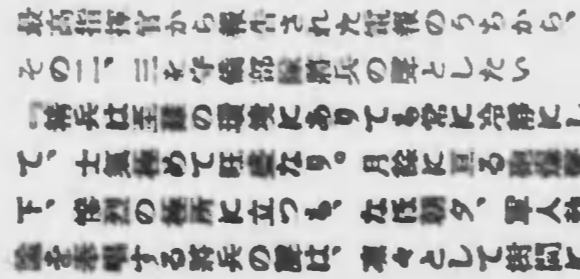
本郷大隊長



佐方大隊長



方藤大隊長



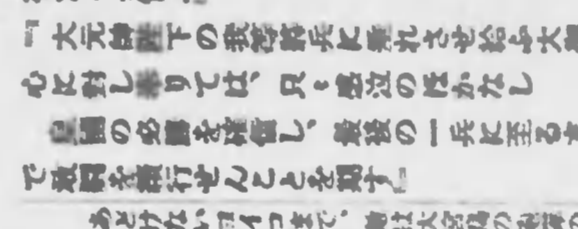
方藤大隊長



佐方大隊長



方藤大隊長



方藤大隊長



方藤大隊長



方藤大隊長

ちには狂戦を加へて、戦艦二隻、駆逐艦二隻を撃沈させ、巡洋艦二隻を撃破し、上陸用舟艇の多数を撃沈して完全に撃退した。しかし、西北海岸内敵隊附近では二度まで敵を撃退したが、猛烈な砲撃隊と共に海岸一帯に亘り大規模な陣地を展張した敵は、その掩護下に正午頃、遂に一部を上陸せしむるに至つた。この方面の守備隊は附近の後方勤務者と共に陣地を死守したが、隊長以下殆んどが殺れるに及んで、敵は次第に前進し、夕刻までに第一、第四飛行場から更にハゴイケに進出して来た。その頃までには揚陸した敵の兵力は歩兵三箇大隊、戦車約三十輛、砲兵一箇大隊に達した。我が主力部隊はその夜半に全力を揮つて壯烈な夜襲を敢行、翌日の拂曉まで肉弾戦を敢行して、一部の敵陣地を奪取したものの遂に撃退するに至らなかつた。

二十五日、敵は依然猛烈な砲撃を行つた。サイパン島からぞくぞく増援部隊を上陸させてその兵力は一箇師団となつたが、夕刻には敵は戦車を伴つて飛行場南側の断崖を越えて、日出洞社附近まで進出して来た。我が部隊は前夜と同じくこの日も再度の夜襲を敢行し、敵に相當の打撃を與へたが、敵の照明弾に妨げられて遺棄ながら目的を達し得なかつた。

二十六日拂曉までに我が部隊は、サベネタパスからマルボ北方に亘る線に敵を撃退すべき態勢を整へた。敵の前進は非常に遅々たるものであつたが、たゞその砲撃のために我が方の損害は増加するのみであつた。よつて二十七日夜、更に南端のカロリナス高地周邊の陣地を整理して、最後の攻勢を敢行する時機の至るのを待つた。

これより先、在住邦人のうち十六歳から四十五歳までの若壯年男子約三千五百名は義勇隊を編成し、敵部隊に分れて將兵と共に最後まで勇戦奮闘を續けた。

三十日、敵は第三飛行場附近に進出し、我が部隊が九全三十機以上を空に撃ち下ろした。サイパン島からの敵の砲撃も熾烈を極めた。翌三十一日早朝、我が部隊は敢て攻勢に轉じ、マルボイド第三飛行場南側で激戦は展開され、血戦死闘が夕刻まで續けられ、敵に打撃を與へたが、我が方の死傷もまた頗出するといふ有様であつた。

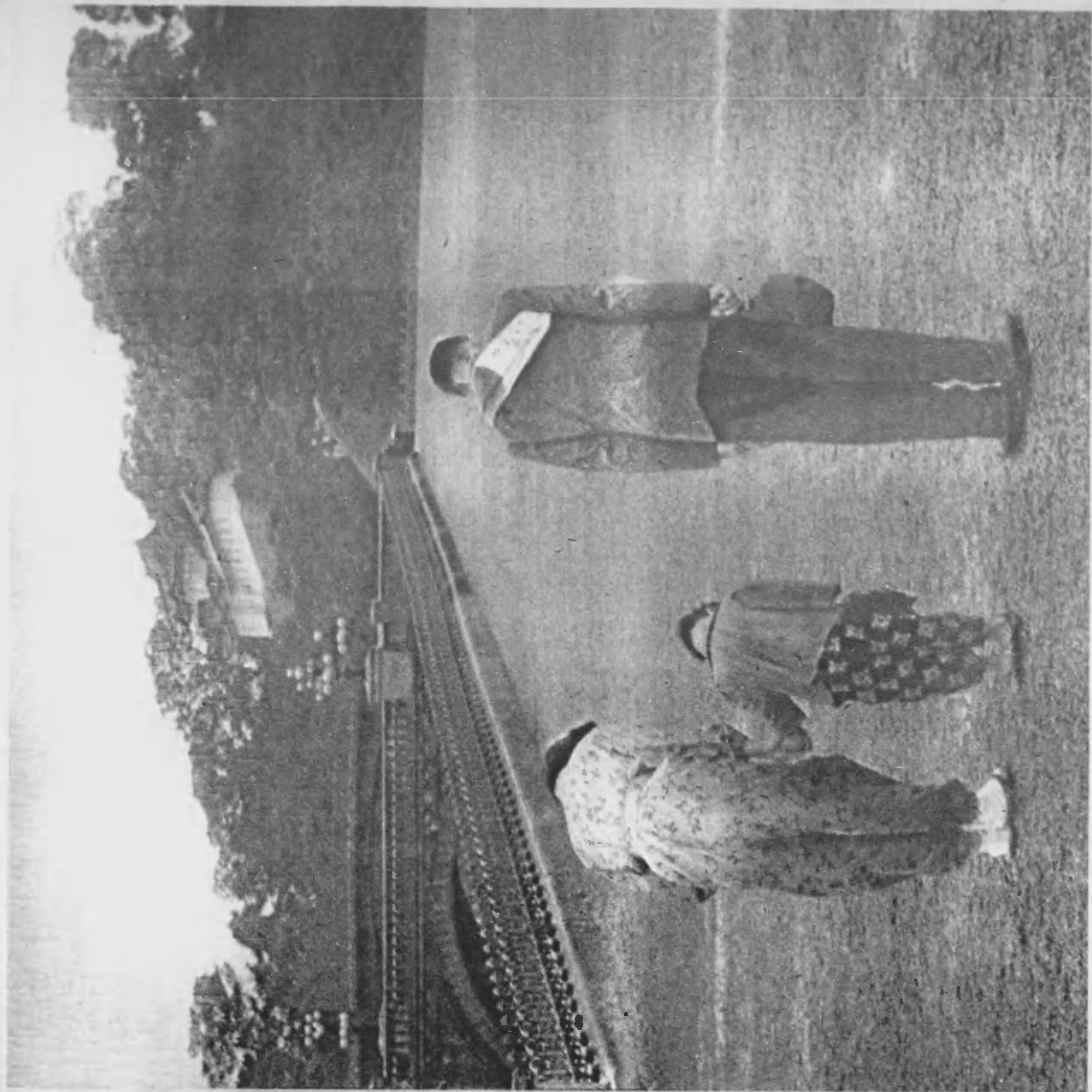
同日の夕、次ぎの要旨の電報が發せられた。『若兵の勇戦にも拘はらず、遂にテニヤン守備の重任を果し得ず、光輝ある軍旗と共に最後を飾らんとす。茲に謹みて御詫申上ぐると共に、長期に亘る懇切なる御指導と奮闘とに對し、深甚なる感謝の意を表す。最後に遙かに御皇室の御榮と帝國の隆昌とを切に祈念す。』かくて倒れて立つ能ざる者は悉く自決し、生存者は一團となつて最後の突撃を敢行して、爾後九月二十七日までに逐次全員が壯烈な戦死を遂げたものと認められる。

以上が大宮、テニヤン兩島の戦闘経過であるが、なほこのほか兩島とも、在住邦人もまた死以上の苦難を克服しながら、學つて義勇隊の作戦に協力して、將兵と運命を共にしたものと認められる。

この本報に見えるテニヤン島も、はるか彼方に居るが、サイパン島も、我が將兵の群衆で飾られたのだ。

この本報に見えるテニヤン島も、はるか彼方に居るが、サイパン島も、我が將兵の群衆で飾られたのだ。





今日戦死の若大書目、靖國の記
 朝日新聞社編

決戦に 誓ひ新た

宣戦の大詔を拜した朝、私どもは日本國民として、どんなことがあつてもこの戦争に勝ち抜き、必ず聖域を安んじ奉ることを誓ひ申しました。戦争のためにはすべてを捧げよう、これが私どもの心底からの願ひでありました。若い者は戦場に邁る心を抑へきれませんでした。年とつた人はまた白髪を染めたい氣持に駆られたのです。

それから約二年十ヶ月、戦争には多くの起伏がありました。そしていま、皇國の興亡を賭けた決戦の時が迫つてゐるといはれてゐます。

この美し國を、三千年の光輝ある歴史の後に灰中に没し去るか、御座置の下、大東亞に永遠の平和を招致するか、そのいづれかを決する戦ひの機は刻々迫つてゐるのであります。

折しもサイパン島に於いて、大宮島、マニラ島の悲報がもたらされた。

將兵や同胞は、敵は必國に迫つてゐると血の警鐘を打たれ、自らは南海の孤島に屍を積んで、必國の標となられたのであります。殊にマニラ島では、わが同胞の老幼婦女はまづ戦火を避けて、同島のカロリナスといふところへ集つて、力一杯、皇軍の奮戦を援けてゐたのですが、敵が最後の防線に迫ると、敵の手に渡るのを潔しとしないで、悉く自決されました。

なかには、まだがんぜない子供たちを自ら手にかけて自決した人も多かつたと思ひます。鐵血の涙をためて、若い母親は

「天皇陛下萬歳、大日本帝國萬歳と、大聲で呼んでござん」と幼い子供に教へ訓し、子供たちもまた無心に

「天皇陛下萬歳、大日本帝國萬歳」と叫びながら、その幼い生命を終末の大義に捧げていつたことでもありませう。

日本臣民としては當然の體情ながら、臣道を全うすとは、かくも峻然なものであることをもう一度反省してみたいと思ひます。

この將兵、この同胞の最後を想ふにつけても、本土にある私どものすべてが榮して臣道を盡してゐると、言ひ切ることができませうか。

現在私どもが、臣道に缺くることなきを期する道は、その職域、身分に應じて實に易々たるものであります。翼の増産や食糧の確保に精魂を打込むのも、資金の供出に率先應ずるのも、實に寸刻も忽せにすることのできない臣道の實踐であります。

決戦の機は迫りました。そしてマリアナ三島の將兵、同胞は、決戦にさきがけ、決戦に處する日本國民の覺悟をあますところなく顯現されたのです。

私どもも、これら將兵、同胞の心を心として、皇國臣民の道をまづしぐらに進まうではありませんか。

〇 十月一日——大宮、マニラ両島に於ける將兵の全自決。同胞また命を共にすとの誓ひに、風刺される。一戦を終つたおれ、人にとっては、この日を戦場でも支る新しい第一日であつた。この朝つ、しみて宣戦詔に復讐を誓つた民衆の胸には、いかに激しい怒りと感動の嵐がたぎつてゐたことであらう。一戦をたどるに、激進していつた同胞の眼を聞き、骨をばさる皇國の御旗をたんとす、誓ひまつたのであつた。

復に地の三ノ攘撃心跡

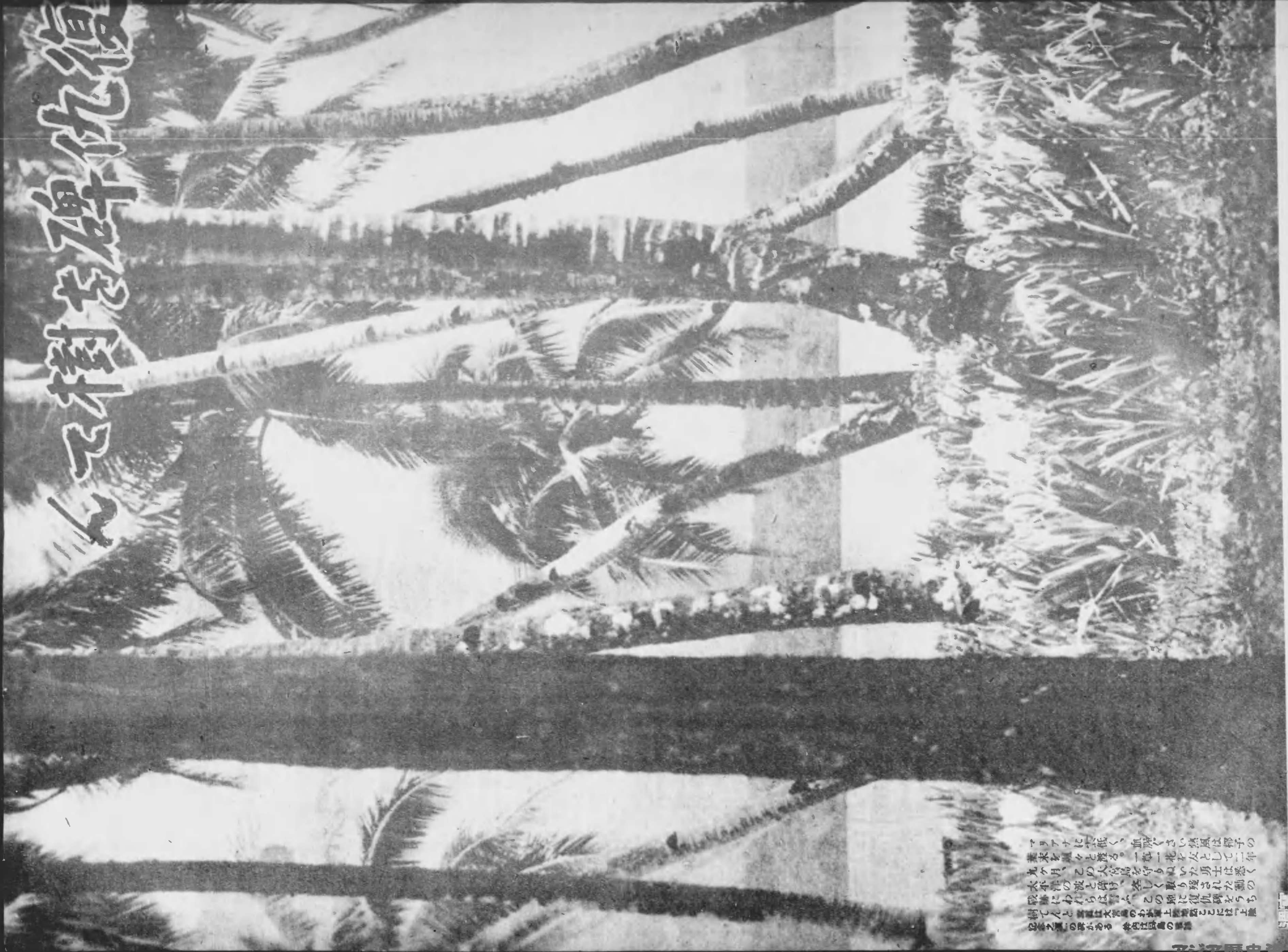
撃滅！

—大宮・テマヤのかなしきまで—

神保光太郎

あめつちをこめし このかなしみ
われら ことばを知らず
唇をかみ 南を望んで ただ誓ふのみ
かのつはもの悲叫び あたにはせじ
かのはらからの最期 ゆめ忘れじ
われらが怒り 天をやき
神の國土 昇げて 炎の闘魂と化す
悠久 大日本の秋
あ、
一億挺身の決意は 愈々澄みて深く
われら 相擁して
生命の砲壘を築き
血を以て 三千年の大義を守らん
きたれ
傲れる狼群艦隊
あけぼのの亞細亞の共榮を擧すもの
俱に日輪をいたたかざるもの
汝ら 人類の敵
撃攘！
然り
一兵もあまさを撃滅せんのみ！

復仇の碑



マリアナに三度、血闘を繰り返した勇士は、
妻を失くし、一子一女を友として二年
九月、この大島を守り抜いた勇士は、
太平洋の波と砕け、空しく取り残された島の
戦跡にわれらは、この地に復仇の碑をうち
建てんとす。是は我々の勇士の功績を
後世に伝えるため、我々の故郷に

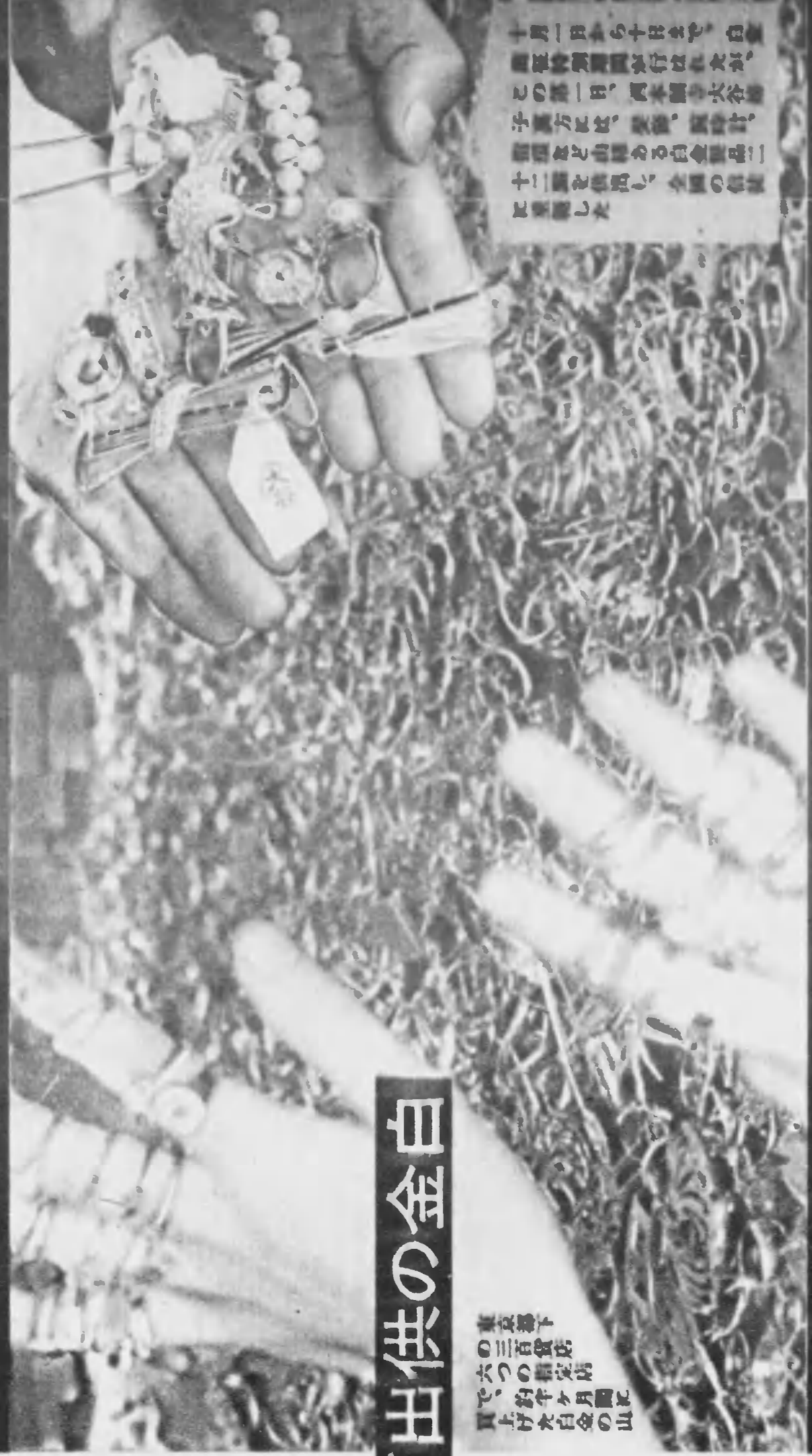


第一に飛行機だ

道への復讐とパイア

白金の出だ

食糧の増産だ



十月一日から十日まで、白銀
展覧期間が行われたが、
この第一日、西本願寺大谷屋
子藏方には、展覧、同時計、
銀座などの山積ある白銀製品二
十二種を供出し、全国の信託
に展覧した

東京下
の三百貨店
六つの新装店
で、約半ヶ月間、
上げ水白金の山に

